



# BSR 通信

BSR 推進室ニューズレター第 3 号

平成 26 年 6 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079 (直通)

bsr\_lab@mail.tais.ac.jp

## さざえ堂の輪

BSR 推進室長  
木村 秀明

### 目次

- 1 頁 : 巻頭言 さざえ堂の輪
- 2 頁 : さざえ堂だより
- 3 頁 : 研究ノート 臨床宗教師の可能性
- 4 頁 : BSR 図書室・今後の予定

さざえ堂が大正大学に出現して、早くも 1 年の月日がたちました。最初はちょっと奇異な目で見られていたこともあったようです。しかし、お堂番の皆さんの地道な努力と、仏教のおもてなしの心遣いによって、日ごとにお参りする人の数も増えていきました。毎月さざえ堂を中心にして行われる花会式も、しっかりと巣鴨の街に定着しました。最近ではテレビでも頻繁に取り上げられるようになり、さざえ堂はいつのまにか巣鴨の街のめじるし、ランドマークになった観があります。

さざえ堂には、観音さまがおまつりしてあります。小ぶりですが、気品のある美しいお姿で、とても優しい仏さ

まです。どうして日本の仏さまは、こうも優しいのでしょうか？ 火焰に身を焦がし怒りの表情を露わにしているお不動さまでさえ、よく見ると優しさをその奥に秘めています。

仏教がインドで生まれたのは、今から二千五百年以上も前でした。その後、ほぼ千年かけてはるばる日本に伝えられ、さらに千と五百年あまりの月日が過ぎました。この間、仏教は豊かに発展し、色々な国々や地域、そして日本の人々の心に潤いを与えてきました。

このような長い歴史を持ち、広い地域にひろがった仏教には、色々な教えがあります。とても高尚で奥深い教理もたくさんあります。しかし、あ

えてそれらの教えの中心は何かと言えば、煩惱（欲望のもと）をなくし、善い行いをしなさい、ということだと思います。これが仏教の実践の基本なのです。

この煩惱には、最も悪質なものが三種あるとされます。むさぼりと偏った邪悪な考え方と、そして怒りです。仏教の実践においては、決して怒ってはいけません、いついかなる場合でも。

善い行いとは、人のためになる行為です。困っている人を助けたり、まわりの人にやさしい言葉をかけたり、おもてなしをすることです。仏さまなどの聖なる方々をもてなすことも善い行為であり、これを特に「供養」とも

言います。

このように仏教とその実践の根底には、やさしさがあるのです。このやさしさを日本人は受け入れ、穏やかで潤い豊かな感性と文化を育んできたのだと思います。

そのために、日本の仏像はやさしいのです。さざえ堂の観音さまも、この上なくやさしいのです。観音さまは、けっして怒ることなく、何の見返りも求めずに、困っている人々を助けてくれるのです。

また、さざえ堂の螺旋階段を上り観音さまに手を合わせることも、おもてなしであり供養です。参拝者のおもてなしをするお堂番さんはもちろんのこと、観音さまに手を合わせ、時には助けていただいた参拝者や、BSR の関係者、さらには観音さまをも含めて、これらがやさしくて美しい実践の輪を形作っています。一年を過ぎてさざえ堂が世に知られるようになったのも、この仏教の実践の輪が、さざえ堂を中心に順調に回転した結果だと思えます。これからこの輪を大切に、さざえ堂の名声さらに高まり、地域により親しまれるよう勤めていきたいと思えます。



## さざえ堂だより

すがも鴨台観音堂（さざえ堂）が誕生してからちょうど 1 年がたちました。さざえ堂前では毎月法要（花会式）や季節に合わせたイベントを行っており、毎日大勢の参拝者が訪れています。先日も若大将のゆうゆう散歩（5 月 19 日放送）で取り上げられるなど、巣鴨の新しいシンボルとして地域に知られるようになってきました。



### すがも鴨台ばら花まつり

5 月 18 日には、落慶一周年を記念して盛大な花会式が営まれました。勝崎裕彦学長を導師に迎え、天台宗・真言宗豊山派・真言宗智山派・浄土宗・時宗の学生・OB が式衆として出仕し、荘厳かつ絢爛な法要となりました。また、本学が東北復興支援の一環として行った「すがも鴨台ばら花まつり」（5 月 10 日～18 日）の最終日ということもあり、さざえ堂前には鮮やかなバラの花が供えられ、散華にもバラの花びらが用いられるなど、趣向を凝らした演出も見られました。

五月晴れの素晴らしい天候にも恵まれて、150 名程の方々が法要にお越しくださいました。バラの花で彩られ

たさざえ堂にくわえ、五宗派合同での法要という珍しさもあいまって多くの方に足をお運びいただけたのではないかと思います。

### バラと仏教

仏教行事にバラの花と首をかしげる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、バラの原産地は仏教ゆかり地であるチベット周辺ともいわれております。また、数珠は古代インドでは念誦の輪を意味する「japa-mālā」と呼ばれていました。これを西洋の人々が「japā-mālā」と誤って聞き取り、彼らの宗教にも取り入れました。

サンスクリット語で「japā」とはバラを意味します。「バラの花輪」として紹介された数珠は、キリスト教（カトリック教会）で今日使われているロザリオの語源になったとも言われています。聞き間違えから始まったエピソードですが、バラの花もまた仏教と浅からぬ縁があるようです。

バラと仏教。お寺ではあまり見受けられない組み合わせでしたが、訪れた人々には大変喜ばれていました。(T)





研究ノート

## 臨床宗教師の可能性①

### 震災後の宗教者による心のケア

「臨床宗教師」という言葉をご存知でしょうか。

2011年3月11日の東日本大震災後を契機として、宗教者による心のケアの重要性が認識されるようになりました。

かねてより終末期医療の現場で宗教者の存在が必要であると考えていた宮城県の爽秋会岡部医院理事長の故・岡部健医師や宮城県の宗教者たちが中心となり、震災直後に「心の相談室」が発足しました。

岡部医師が室長となり、宮城県宗教学法人連絡協議会に所属する宗教・宗派の宗教者やカウンセラーなどの有志が相談員となって、電話相談、仮設住宅の集会所での傾聴活動「カフェ・デ・モンク」、「葛岡斎場」での月例慰霊祭、さらにはFMラジオで番組を持つなど幅広い活動を展開しました。

相談室の事務局を東北大学の宗教学研究室が担ったということも、興味深い点です。各宗教・宗派によって構成される相談室を取りまとめるには、どの宗教にも中立的な立ち位置にいる宗教学者が適任だろうという考えがあったようです。

### 「臨床宗教師」講座の誕生

そして、その流れを受けて、2012年4月に東北大学に実践宗教学寄附講座が開設され、「臨床宗教師」の養成が始まります。

寄附講座ですので、国立大学とはいえ国からの財政で運営するのではなく

WCRP（世界宗教者平和会議）や（財）東北ディアコニア（キリスト教のネットワークからの寄附金をもとに設立された財団）など、宗教・宗派の枠を超えた寄附金によって運営されています。



「臨床宗教師」は、海外の「チャプレン」と呼ばれる宗教者をモデルとして、岡部医師が命名をしました。チャプレンとは軍隊や病院など、宗教施設ではない場所に従事し、傾聴や時には宗教儀礼をとりおこなう宗教者のこと。アメリカの病院では、チャプレンとして宗教者が常駐することは違和感なく受け入れられるようですし、軍隊では軍組織の一員としてチャプレンが位置づけられています。

今の日本では従軍するということが、とりあえずは無いわけですので、「臨床宗教師」は、「宗教施設を離れて、医療現場や災害現場などの公共空間で心のケアを行う宗教者」を意味すると理解するのが妥当かと思います。

東北大学の講座では、約3か月間の講義と実習を経て、修了認定されるシステムです。（認定資格ではないことは注意が必要です。）

すでに4期が終わり、57名の臨床宗教師が誕生し、各現場で活動を行っています。（現在5期目が開講中）

では、どのような講座が行われているのか、少し見ていきましょう。

### 「臨床宗教師」講座の内容

2013年10-12月に開かれた第4期の講座の時期・修了者は以下の通りです。

2泊3日×1回/1泊2日×2回  
全73時間、19名（女性3名）

第4期の講座の内容をみてみますと、臨床宗教師の理念や倫理、スピリチュアルケア、グリーフケア、宗教的ケアといった実践的講義、民間信仰論、地域と文化、宗教間対話といった宗教学的講義が座学としてあり、そのうえで、多くの時間が実習（ロールプレイ・振り返り等も含む）に割かれています。

また、各受講者が順番に自宗教・自宗派の宗教儀礼を執り行い、他の受講者も体験をするという時間が、講座の時間外に朝晩に設けられているのも特色の一つでしょう。

公共空間では、さまざまな信仰を持つ人々と向き合うことになります。そこでは、自身の信仰を押し付けることなく、相手の信仰や精神性に寄り添ったケアが求められます。そのために、実習からの学び、そこからの反省、自分との向き合いが必須となるのでし、他宗教の儀礼を体験することは宗教観を拓けるきっかけになるのかもしれませんが。

次回も臨床宗教師について論じてみたいと思います。（〇）



※写真2点は各宗教・宗派の法服を着用し、研修の一環として慰霊法要をしている場面。（東北大学実践宗教学寄附講座HPより）

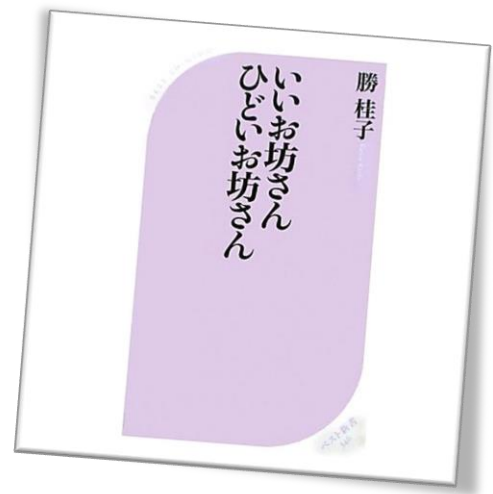
## BSR 図書室

勝桂子著『いいお坊さん、ひどいお坊さん』

(ベスト新書、2011 年、823 円)

本書の著者勝桂子氏は行政書士であり、遺言・相続・改葬等のいわゆる「終活」分野全般の相談を受けていたことを契機として、生きづらさと向き合う超宗教・超専門領域の任意団体「ひとなみ」を主宰しています。その活動を通して「死んだときだけがお寺の出番ではない。この生きづらさを乗り越えるために寺院・僧侶との正しい付き合い方を探る」と著したのが本書です。

第 1 章、第 2 章では、現代の寺院・僧侶が置かれている状況と一般の人々の寺院・僧侶、そして葬儀に対する意識を明示し、そのギャップを浮き彫りにしています。第 3 章では、東日本大震災の時とその後の宗教者の災害支援の取組みを紹介し、第 4 章では、一般の人々と僧侶のギャップをどのようにしたら埋められるかを考察しています。そして第 5 章では、僧侶でなければできないことと題して積極的に社会活動に取り組む僧侶の



事例を紹介しています。

全章を通していいお坊さん、ひどいお坊さんが登場していますが、単にひどいお坊さんの事例を紹介して批判しているわけではありません。本来数値と情報で測れない「お気持ち」を再考することで、「モノとカネ」という価値観・経済神話の呪縛から解放し新しい価値観を見出す「意識改革を図る力」を仏教・僧侶が持っているとの期待・希望を持って本書が著されていると感じました。(M)

## 今後の予定

6 月 21 日 (土) 11 時～12 時

12 時～16 時

7 月 4 日 (金)、5 日 (土)

16 時開場予定

花会式 (真言宗豊山派)

鴨台カフェ 僧話花

鴨台盆おどり

※ 詳細は大学 HP で報告いたします

鴨台観音堂前

5 号館 1 階

礼拝堂前広場

7 月 19 日 (土) 11 時～12 時

12 時～16 時

花会式 (真言宗智山派)

鴨台カフェ 僧話花

鴨台観音堂前

5 号館 1 階

